912.4
Ti238t11

戲曲叢書

天神記

088318−000−2

912. 4−Ti238t11

天神記

近松　門左衛門／著

M28
DBI−0156

9124 T:23 6 31

臨江亭

天神記

正德三年二月十五日初興行、作者六十一歳

近松門左衛門作

宣風坊の北あらたに栽る所。千金の吟二葉より馨しく。仁壽殿の西曲宴の時。王佐の文一天に輝き。梅が香ふかき菅原や。天滿神の威德こそ。うしこき國の守りなれ。古への聖代に臣五人有つて天下大いに治るとや。今秋津洲に一人の臣巍々たるかな。君たると唐堯に准へ奉れば。民また舜の民の門。明行春の壽きも上に習ひて道しある。喜びと延し年號に延喜の帝の御代の春。雲井の庭ぞゆたのなる。爰に唐土照宣皇帝の使裴文藉と云ふ者。來朝に依て大内に召るれば。今と盛の一木の梅。瑠璃の盤に移し植南階に捧げ。裴文藉謹んで隣國會盟の悦びと奏し。抑此梅は唐の帝の御宇。天下文學盛んにて萬民太平と稱へし時。諸木に勝れ花の色香と增たる故好文木と名付。それより國家文學起る代には。花も色濃く匂ひもふかく。文學廢る代には色香と失ひ。博學の人の植る種は芽と出し。不學の人の植る種は土の底に朽果。君子の德と備へし名木。然るに日本の大臣和漢の學に貫通し。此梅ふかく所望の由我帝是と感じ。萬里の波路と渡されたり。彼大臣立出請取給へと述にけ

国立国会図書館 29.7.22

336933

る。本院の左大臣藤原の時平公陣の座とつゝと立。日本の大臣とは我と。偖は我學力異國にも隱れなく。好文木と渡たされしな。菅丞相などが儒學の家で候と。位に登りいきれ共文盲不學の位盜人。誠の學者とは此時平道に心ざす人々。我門弟子となつて學問あれとぞ仰せける。裴文藉顏とながめ。いや日本の大臣とて一人には限まじ。去年の春唐土に渡り好文木と望まれしと。宮中に召し詩文と敎覽、則我國の裝束と給はりし。其覺有る大臣請取給へといひければ。時平と始め諸卿の面々去年異國へ渡りしとは。公家の內には覺え なし。如何なる異國の謀ごと各眉とぞ顰めらる。君も不思議の敎慮にて。左大臣一人の計ひも如何なり。菅丞相と召すべしと頓て勅使と立らるゝ。召に應じて菅丞相いつに替りし御裝束。冠にあらぬ綸巾深衣の裳飄々と。金華の沓引ならし南殿に立給へば。家の子俱利加羅太郎春綱其丈七尺六寸。無双の骨柄勇力萬人に勝れし故。日本今奬贈と異名せられ御供に從ひしは。古への照烈帝に關羽が添たるごとくなり。裴文藉禮となし珍しや大臣。我こそ照宣皇帝の學士裴文藉。よも見忘れ給ふまゝ是ぞ所望の好文木。植置て文學の色香と國にそへ給へと述ければ。菅丞相聞召し不思議の人に逢ふとよ。臣常々好文木と慕ひ幾春過し思ひ寢の。夢路は遠き唐土船。唐帝の王宮に至り。裴文藉と云ふ臣下に筆談し長編の詩と草し。裝束と給はつて着すると思へば。夢醒て枕と見れば此裝束。誰が置し共不思議とも人にも語らず過つるに。只今逢ふは夢に見し裴文藉。聲も面も違はずと語り給へば横手と打。偖は夢の魂我國に渡り詩と作り給ふこのや。只人ならぬ大臣と退つて敬ひ尊めば。君と始め百司百官暫し感じて在しまそ。時平の大臣冷笑ひ。夢に魂通ふなどゝは女童の俗說學者の口のらいはぬと。莊子が夢中に無我有の里に遊び。胡蝶と成て牡丹花に戲ふれしなどは。皆虛誕の寓言とて。佛法に言ふ方便の僞り。聖人に夢なし不學者の口ずさみ。事可笑やと言ひければ。菅相聞もあへ給はず。ム、聖人に夢なしとは何れの書に出たるぞ。あればこそ孔子も。夢にだも周公と見ずとの給へり。夢の中に聖胥の國に到り。天下を治め給ひし黃帝は聖人ならずや。我朝の聖德太子身は夢殿に有ながら。唐土天台山に至り。前生の法華と將來し給ふ。是らは如何なる義理やらん。學力有る時平公に承らんとの給へば。一句にはつたと詰られ。ナ、非學者論に負ず御邊などゝ論はせず。是此好文木學者が植れば色香とまし。不學者には花凋むと云ふ屈竟の證據。植て時平が智惠の花。咲せて見せん

と立寄れば。風も吹ぬにはら〳〵〳〵と。一輪も殘らず散る花に。不學のまるし顯はれて。各どつと笑はるれば時平は面目失ひながら。邊りと白眼んで居たりけり。菅相可笑しく思召しいで某も一枝折。宿の枯木に接穗して咲や咲ずや心見んと。標と手折差のさし袖ぐゝみに持て立給へば。不思議や此枝蕾と生じ爛熟と花開け。匂ひ四方に芬々たる菅丞相の文學。和漢に秀し才智ぞと花も物言ふ斗なり。堂上堂下あつと斗り奇異の思ひとなし給ふ。敵感猶も淺このらず。斯る不思義と末の世に殘さんと。忝くも震筆にて菅丞相の畫像と寫され。御簾に掲げ給ひける。偖こそ渡唐の天神と。末世に仰ぐぞ有難さ。重て宣旨有けるは唐土の使裴文藉。暫く都に留め置き右近の馬場にて。小弓の勝負曲馬と乘らせて慰めよ。時平の大臣菅丞相兩人是と甄應そべしと。玉簾ふかく入御なれば。梅が枝うたふ宮人の梅の笠附前句附連歌俳偕此神に。さのふる御代の春なれや。柳櫻の唐錦唐使の宿は鴻臚館。時平の大臣の馳走として。我に親しき物川の宰相定國。藤原の菅根の朝臣と馳走人に付置。毎日雛豕猪と持運び朝夕の膳部にも。長崎より唐人流の料理人と呼び寄せ。雛飯羊粥豕の燒皮熊の掌狸の澤渡猿の木取。菓子に取ては籠羹羊羹かすてら煉るてら。

砂糖羊羹鹽腸羹。伏兎曲の煎餅。饅頭黍子麺笋羊羹。名も聞馴れぬ食物何れも豕の油あげ。ちんた淡盛覆盆酒無量の名酒名菓ともつて。色とのへ品とのへ馳走と以て抱込ば。裴文藉も傾ふきて何事成共此返禮。時平公の御用ならば聞たき色目見へけるが。定國菅根兩人と招き。今度某が來朝は。菅丞相一人の爲なるに。本人の菅丞相は無馳走して却つて時平公。御兩人と付置眞實見へたる御馳走。我身の面目本土に還つての物語。此御禮は詞と以ても謝しがたし。異國人の某に御用とても有まじきが。若相應の御用もあらば。隔てなく承らんと打解てこそ申けれ。兩人すはや仕濟せしと近く依つて小聲に成。惣じて菅丞相己が學問と鼻にあて。人と輕しめ侮つて唐の天子の勅使とさへ。斯樣に鹿相の接遇ひ。是にて萬事と推量あれ。時平公無念とおさへ鬱忿更に止となし。御身時平公に組し菅丞相逆心と起し。唐土と頼み日本と覆がへせ謀有りとの。一通の書翰と認め見せ給はゞ。それと以て謀叛人と奏聞し。菅丞相と刑戮の罪に沈むべし。よい仕合で流罪は必定。時には時平公より貴殿に黄金千兩。引出物せらるべしと。兼て用意の五百兩五包。二人が兩の袖より出し。殘る五百兩は成就の上のと。先さきへ渡すと日本にては手付と申。是と取ては違背

ならず。首尾能頼み存ると退引させず談ずれば。唐土に稀なる黄金に一心迷ひて打頷き。萬事某に任されよ。近日右近の馬場とやらんにて。小弓の勝負せらるゝ由。それ屈竟の時節其内時平公に對談し。謀し合せて思ふ儘に本望遂げさせ申べし。ヲヽ大慶〳〵先時平公に相達し。悦ばせ申さん互に穏密〳〵と。座敷と立しが。疑がふにてはなけれ共。時平公への念の爲御誓言あれかしと云ければ。尤の御念去ながら。日本の誓文に。申し下す神々の名と知ず敬へ給へ。いや唐人の誓文に日本の神は。罰も驗も有るべからず。唐の誓文と立られよと云ければ。裴文藉手と合せ。にゐつう〳〵。すのこ君ちり〳〵あう。かまそなふぐたのんちらい。こばとこふんでれあぼとこけべいる。はこちよんともしひにや。ふやらのふやらのふう〳〵あう。てれん〳〵と云ければ。偖異國には珍しい。てれんの神も在ましの。のらせんしやうの御神と。一体分身なるべしと笑ふて。立や春霞菅丞相の花園は一條大路と出はなれて。うちのに續く薄霞。梅の品々植られて。盛りになれば都人。袖とつらね裳と。染て色めく有様に。紅梅殿と名付しも。分て一木の紅梅の花に愛ての名なるべし。今日は日影も閑けしと。御臺所の花見の酒宴蓆片敷く花莚。女房達の出立はへ。幕の御紋の梅鉢も共に色香や染ぬらん。幕しぼらせて御臺所。あれ〳〵あの紅梅に南へさしたる一枝の白梅は。彼唐土の好文木の接穂なるが。一夜の中に彼の如く枝繁り。花も一度に紅梅の。焦るゝ中に白梅の雪と見る迄咲分しは。何に似たるぞ譬へて見や自らが見立には。誰粋かけし兩面の。紅の小袖に白妙の。綿とふくむと云はま欲し。いづれもいのにとの給へば。女房達とり〳〵に是は優しき御見立。又私は白齒の娘が口紅さして。笑るがごとしと云ふも有。社の朱の玉垣に。白棉のけしと見立れば。お中居の下女が末座にて。お辨當の膳立仕乍ら申し私の見立には。朱椀の定器に上白の飯盛つた様なと。見立も心一抔と笑ふて興に入り給ふ。あれ〳〵梅の木の下に赤子の泣聲。何やら見ゆるが捨子そふな。慈悲と守る世の中に邪見の者は絶ぬのと。の給ふ所に十八九なる女房の。袖は鹿子の金糸入。後ろ結びの染帶ら内裡に流行中巾や。中色入れて地白染。帽子の額氣高くも。花の木影に吟行ひて手に持笠とのさしにて。花見る顔でしほ〳〵と。捨子見る目にこぼるゝは梅の露やら涙やら。行きやらで彳り彷徨ば。あれはあの子が母そふな。ぞふするぞ見屆けよと。下す籠や綾幕のうち鎮まりて在ます。女邊りと見廻し泣子の傍に走り寄り。尤愛や母と

尋しの乳欲いのと抱きよせ。口に含めて我身とも。とともに根笹の苔莚。子持むしろと添乳して搾り賺そぞ哀なる。ヤア八の來ぬ間に乳首放して寢しやと。そつと退ばわつと泣く又立寄て乳と含め。すかし寢せても寢いらねば。懷に抱締めゆり上げ立て。寢んねこせ〳〵。寢んねこ〳〵寢んねこせ。音せぬおよれ犬の子〳〵。目だに醒たち脊にきつと脊負ふて。神樣へ參らふ〳〵。神樣の土產にはでん〳〵太鼓に簫の笛。お山人形に花れりきせて。打きせてきせて雉子のめん鳥はろりとおとひて。しよのしよのお尤愛よの。ヤねゝしたそふな。今の間にも拾はればそなたは果報。母は是が名殘ぞと泣く〳〵そつと下し置。立歸らんとせし所と。それ逃すなと幕の內より女房達。むら〳〵と走り出。是徒者捨る程なら生ぬがよい。子が嫌ならば男にあふ時のら。其さし引したが善いはいの。跡先知らずきはひ口に胚んで。此處と何處と思やる。菅丞相樣のお花畑。父なし子捨る所じやないぞ。あた見苦しい持て往やと呵られて涙と流し。御咎は道理ながら可愛さに捨る此子なれば。お慈悲深き菅丞相樣。木蔭と頼みに捨さふらふ。我等は大內踏歌の節會の役人。十六夜と申す舞姫なるが。時平の大臣の御內秦の兼竹と申。御隨身の侍と人知れず馴染。忍び逢夜の

數重なり身も重くなりけると。傍輩達の介抱にて身二ッには成しのぞ。大內の局にても育て難く。殊に夫兼竹の主君。時平の大臣世に情なき氣質なれば。洩聞へては夫の身如何なる祟り咎めもやと。產ぬ先の氣遣より生落しての心苦しさ。余り詮方なき儘に御慈悲深き菅丞相樣。哀れお目にも懸れのし。鳥類畜類迄も御憐み深ければ。よもや慘ふもなされまじと。お情け頼む此捨子。親は浮世の名殘りの霜。花は凋みて消ゆる共。このみと拾ひ助けさせたび給へと。語りも敢ず泣ゐたり。御臺不便の御涙自らも子と持て。尤愛さ思ひ知られたり。殊に我夫菅丞相樣元父もなく母もなく。是善卿の御庭の梅の木蔭に天降り給ふと聞く。其因緣も有なれば心易のれ拾ひ取。お乳と附て育つべし去ながら。時平の大臣は常々我夫の菅丞相と。妬みそねみて中惡し。其家來の隱し子と拾ひしと聞へなば。禍ひの基ひ必々沙汰しやるな。女房達も其心へ。ヤア人目有りはや歸りやとの給へば。有難いお情あの子一人と申ながら。夫婦諸共三人の命。お助けなされし同然。愁のお禮申も恐れがましお腰元衆お取なし願み上まする。このまへて〳〵何れも戀と成さるゝ共。胚まぬ樣に諸事萬事。ひのへめに遊ばせ先お暇と立歸る。御臺所も御輕口子と儲けては母と云ふ。夫婦中

よく幾人も子をひめのゝよ梅が香に。緑あらば又逢ふべしと。興じて謠らせ給ひけり。比は正月十八日。右近の馬場に平張うたせ。客位の座には裴文藉中官下官相隨がへ。樂器を調へ、旗鉾飾り立させ。日本の射藝さぞ有るらんと見物す。主位の座には菅丞相。衣冠正しく左右の兵衞近衞司。袖をつらねて列座たり。本朝の弓はは長く半弓好む。異國人の饗應に叶ふべからず。三々九の勝負にて揚弓と射らるべしと。矢落には錦の縵幕釣的に響きと付。矢通りの日覆ひに。作り花を以て葺たれば。右近の馬場の松櫻。冴のへる雪に花と見せ。矢取の翁が白髮迄。若やぎてこそ見へにけれ。射手の役は菅丞相の若君。菅秀才敦茂君十二歳。菊とおりしたる袙の裝束。浮紋の小袴踏しだき。弓矢手ばさみ出給ふ。大人氣なくも時平の大臣。髭くひそらし肘を張り。射つけて呉んず其氣色。互に色代一禮終り。一番に菅秀才作法進退しほらしく。弓を矢番ひ虹形に引絞り。暫したもつて目當の狙ひ。御父を始め諸見物息を詰たる其内に。切て放せば的の眞中。くはつしと當つて鈴の聲。當りと答ふる矢取が聲。いや〳〵をつと贊る聲。暫く鳴も鎮らず。時平最初にけぢめと取れ大きに急き。あの的射割て替させんと思ふ圖に引つめ。忘るゝ斗狙ひ詰め。切て放せば的を越し。ぼうに當つてどんと鳴り。左ながらどんにぞ見へにける。是を勝負の初にて童子二人左右に立。當りには金のざい外るゝ矢には白紙のざい。唐土八は糸竹を調べ。其爭ひは君子なる。小弓の勝負を挑あふ。三々九をば繰のへし矢數あまたに及べ共。菅秀才は空矢もなく。時平の大臣の當り矢は三本ならではなのりけり。時平も今は血眼になつて。是幹汝も我も殘る矢は一本づゝ。今迄射たるを捨にして。此一本が今日の勝負。射てまはせ。承ると引くはへ暫し狙ひて。きつて放つに過たず。的のさゝ穴貫ぬいてこそ立たりけれ。時平は身を揉み牙を噛んで腹を立。箭込に射て呉んと。よつ引のため狙ひすまして放つ矢が。ずつと外れて矢取の翁が小鬢先。烏帽子を懸けてぐつとたち。涙も朱の頬抱へあ痛〳〵と逃て入。唐土八都人菅秀才を贊る聲。時平の大臣を笑ふ聲。傍りも響く手なり裴文藉座を立て。大いなるうな菅丞相の德たること。孔孟の道を學んで白樂天が詩風とうつし。韓退之歐陽子が文にも耻ず。六藝一ッも欠ざると賞じても余り有。是ぞ唐の天子の契約の綸旨。靜かに拜見せられよと。錦の袋より一ッの箱を取出し。渡さんとする所を時平飛のゝりひつたくり。是菅丞相御邊日本の臣下として。異國の帝より契約の綸旨とは心

得がたし。披見して糺さんと。封捻切てさつと開き一々に讀終り。偖こそ〳〵是と見よ。唐の帝に一味し主從の証に。唐朝の裝束と與へられ日本と傾ふけ。此時平と始め和國の忠臣と亡さんとの文章。是ぞ後日の證據と懷中し。ヤア菅丞相が逆心顯はれたり。搦め取れ承はると。時平が郎黨我も〳〵と馳集まる。裴文藉大聲上。ヤアおろかなり時平。菅丞相は唐朝へ隨ひ我國の味方なり。まやくはん共時平と討取り。菅丞相と大將にて內裡へ押寄せ。日本の帝と生捕と。中官下官鉾とつ取兩陣戰のふ振にして。日本人も唐人も遽間と見て菅丞相と。討ん〳〵と狙ひよる。元より自在と得給へば。若君と小脇に掻込み飛鳥の如くひらりと外し。ヱ、淺ましや時平。某と無實の罪に沈めんとて。此間異國人と語らひ。巧み置たる謀とは鏡にうけて知られたり。日月物は言はねども四季の時と違べず。草木花實と顯はせば眞の道は明のなり。菅丞相が罪なきも汝等が惡逆も。天の鏡に照をべしと。はつたと白眼み付給ふ。兩眼の恐ろしさ軍兵思はず威に押れ。手さす者もあらざれば。靜々と還御なる御有樣こそ由々しけれ。斯る所に俱利加羅太郎。夜刄の荒たる如にて宙と飛で駈來り。日本人唐人のせひと云せず。鉄の棒なぐり立〳〵。微塵になれと打立れば四方へばつと逃散つたり。つゝと入て裴文藉が。胴骨掴んでくる〳〵と持て廻り。大地にどうと打つけ頭と踏へて。ヤイ唐人め。我と誰とこの思ふ唐にも今は珍しい。菅丞相の御內俱利加羅太郎今奬噌。ヱ、下郡た淋もしい唐人め。此比毎日時平が馳走。心得ずと思ひしに喰物に羈されし時平と一味して唐の帝の綸旨と作り。我君と罪に沈めんとは巧しな。最早唐へも戻さぬ。是のち直に冥土へうせふと。頭の鉢も割て退く。碎けよ割よと踏む程に。目鼻より血と流しうめき悲み泣いたり。コリヤ豕の油揚に砂糖つけて喰ふたと。此味さと喰較べよ。打殺すは易けれ共後日の證據助くると。引掴んでゑいやつと十間斗投付しは。手玉と取が如くなり。時平の大臣下知となし。食事の爲に飼置し熊猪の綱と切。哄と作つて兩方より喚き叫んでのけたりけり。俱利加羅にこ〳〵打笑ひ。ホ、本奬噌は虎と組む。今奬噌には熊猪。譬へ熊でも狼でも我等が心は。矮狗犬子こい〳〵〳〵と呼び懸る。猪も熊も氣力に恐れ鼻と鳴し猛りとのき。遽間と窺ひ飛のゝる。丁ど飛越へはつたと當。ひらりと乘てはひんずと締。劒の怒毛刄の牙。石と蹴割り木の根と穿ち。組んづ解いつ揉み合し。流石の猛獸息切れて弱る所と。引よせ〳〵尾筒と掴んで岩角に。續けさま二三十。ばつた〳〵と打付く

れば。骨は碎けてうは袋。小石と詰めたる如くにて。微塵に成てうせてけり。唐人殿お料理出來賞翫あれと。群がる中へ投込んでのつさ〳〵と立歸る。君は名におふ誠の道文學好む梅の花。郎黨が武勇の道敵と見て隼ると。まつ先悪て早咲梅。いのなる悪鬼悪神もやつて鎗梅尖り梅。眞向碎く拳梅。山梅野梅すばい梅。手並も腕の力とも。知る人ぞしる梅鉢の。御紋の屋形に歸りけり。

第一

蓼の虫の蓼葵と去は。苦きに馴て苦きと知らず。君として遠ざくべきは辨佞の臣なり。時と移さず時平の大臣。裴文藉に繩とのけ遽しく參内し。偖も菅丞相夢の魂唐土へ通ひしとは。跡形もなき僞り。數年異國の大王に内通し。勿躰なくも君と失ひ奉り。臣が如き忠有る者と亡ぼし。忝くも天照大神の御神孫受嗣せ給ふ大日本と切取り。唐土の夷國に隨はんとの一味契約の手合せに。好文木に托せ彼奴が來朝。彼内通の書翰と奪ひ。裴文藉と生捕り候。彼奴と早くぼつ歸し。惡逆無道の朝敵菅丞相一家の奴原。五刑の罪科に行はるべし。證據の一通是に候と御前に指出す。君甚驚のせ給ひ御簾高く揚させ敵覽あれば。紛ふ方なき唐の帝の朱印日本征伐の約諾なり。慮猶も疑はしく。不思議やな菅丞相は天の穂日の命の嫡孫。累代學問と以て家業とし。朕七歳の時より物讀み習ひし博士なれば。師匠は親と尊とみ位は右大臣の右大將迄登せしに。何の恨不足にの異國に組し。我國と頗ぶけんとは心得ず。先其裴文藉と拷問し。落すば死罪に行へと宣旨有る。時平の大臣なむ三寶。巧みの讒言顯れては惡のりなんと。ハテア宣旨にては候へ共。菅丞相が咎と差置き。彼と糺明せられんは。異國の聞へ事と好むに似たり。命と助け追歸し申さん誰の有る。武官の輩博多の地迄送り屆け。もと舟に乘せて追歸せと御庭に飛で下り。裴文藉が繩引ちぎり手と取て。裝束の袖の影本望遂げし萬の禮。口で失とは云ねども金が物云ふ舌のなり。そつと渡せば唐人も通辭いらずに聞とるや。耳と數へて五百兩懐中に押隱し。はう〳〵本土に歸りけり。兼て時平に心と合せし。物川の宰相定國。藤原の菅根の朝臣。折りこそよけれと詞と揃へ。菅丞相が逆心の證據一に限らず。已が領分河内の國佐田の里に屋形と造り。諸神諸佛と勸請し君と調伏仕る是一ッ。洛中公家武家は申に及ばず。町人土民の子供迄手習學問に事寄せ。懐け親みし故。其親々子に迷ひ。勅命は背く共菅丞相の爲には。命と捨ん

と申程諸人と靡け候。上へ對しての無禮是二ッ。今樊噲と申す强力の郎黨一人と痛め苦め洛中と騷がし威と振ふ。名こそ多けれ樊噲と兼ると。唐土と重んじて日本と侮どる証。是とも忍ぶべくんば何れとの忍ばざらん。假臣とも逆臣とも詞に及ぬ菅丞相。助け置るゝ物ならば國破れ民疲れ。御位と奪れ給はん事目前に候と。兩三人が詞と巧み。引そへ取そへ歎へ上たる讒言に。君賢王とは申せ共月日の光と村雲の。覆ひ隱さが如くにて。誠と聞召れたる歎慮の程こそうたてけれ。斯る惡逆不忠の臣と知らで過しは朕が誤まり。急ぎ菅丞相が官祿と止め。殿上の札と削つて筑紫太宰府へ流し遣すべし。妻子共は別々に引離ち。五畿内と追拂へ。今樊噲とやらんが。手足の筋と切て嚴しく獄屋に繫ぎ置けと。以の外の逆鱗にて御簾さつとぞ下たりける。時平は二人に領さ合。仕濟した數年の本望我が胸の中。はらりつと夜の明た心地する。先菅丞相と是へ召よせ衣冠と剝ぎ。直に配所へ送るべし。其間に兩人は大勢引具し彼が屋形と打毀ち。妻子共と追拂ひ今樊噲と搦め捕れよ。尼が崎大物の浦迄は籠輿。夫より舟路流人船の沙汰せられよ。某が家來共はわらざるか。追立の官人共用意せよと。関いて菅丞相の御方へは。急ぎ參內有るべしと走さつて使と立にける。時平が執權笠見の藏人景村。御隨身泰の兼竹。車舍に扣へしが。宮中にて御家來と召れ候は。何事の御用もやとぞ伺ひける。サ、菅丞相が日比の惡逆顯はれ。筑紫太宰府へ流罪仰付らるゝ。大物の浦の舟場迄。汝等兩人籠輿の警固せよ。妻子眷屬は云ふに及ず如何なる重縁たり共。籠輿の傍人と拂ひ。少もゝ勞はるな。偖又別して言ふ事有りと小聲に成。たとへ遠國に流されても。存へあらば後日の仇。流人船大物の湊と二三里も漕離るゝ時分。早舟にてぽつ詰兵庫和田の岬邊。海賊の躰にて菅丞相と海へ切て切流せば。跡に何の氣遣なく寢醒も易き寶舟。時平が一生の年越汝等賴むと云ければ。笠見の藏人莞爾と笑ひ御心安ふ思召せ。常々菅丞相己が才智有る儘に。天下の政道手に握り。君は有てなし物塵辛い目と見せんと。常々齒ぎしみ致せしに。時節來つて流人とは目出度し〳〵。兼竹と兩人心と合せ。沖中にて讀人知れず討て捨んに何事の候べき。何と兼竹そふでないのと云けれ共。兼竹は十六夜と忍び寢に儲けし子と。菅丞相の御臺所に預け置。浮名と包みし御情御恩の程と忘れのね。差俯ふいて居たりしが。勅諚なれば流罪の警護は畏つて候へ共。沖中にて密のに討奉れとは私の御斗らひ。天に口なしと申せ共人の口則ち天の口なり。菅

丞相は古今の學者。朝庭鹽梅の臣下なり。一旦の逆鱗にて流罪せらるゝ共。重て召返さるゝ時。舟路にて時平の大臣が討て捨させたりと沙汰あつて。其罪又其身の上に來る時いゝ〻償ひ給ふべき。尼が崎迄嚴しく送つて舟にのせ。藏人と某は罷り歸り候はんと云も敢ぬに藏人。ヤア謂れざる人の差圖。御邊歸らば氣儘にせよ。此藏人は御意に任せ、尼が崎迄急度送つて舟に乘せ。又早舟にて追のけ。氷底へ切てぼつはめんに何の怖いとの有。但御邊は怖いの。ヲヽサ口では人も切よい物。菅丞相には情と蒙り恩と受し者多く。名殘と惜み陸地舟路。余所ながら見送る者多うるべし。是等がきよろりと見物して。菅丞相と討せ御邊と生て置ふの。どふぞ無事で歸つて見よと。冷笑へば時平の大臣。ヤヽく聲高にいはぬと。兼竹めが氣の弱さで討とは叶ふまじ。陸地の警護は兩人。討手は藏人一人心得せよと云所に菅丞相參内の由披露する。對面しては事むつかしし。役々の官人油斷有なと云捨て。記錄所に隱れ入にけり天運命とゆる時は。博識の智者も其身と知らず。御悼はしや菅丞相。俄の召は何事と衣冠更ため參内有。待もうけたる檢非違使大判事。此處彼處よりむら〳〵と走り懸つて。兩の御手と引ばり御冠と打落す。是は如何にとの給ふ所に。小槻の宿禰宣命と差上。菅丞相勅勘に依て遠流せらる。配所は九州太宰府と高らかに讀上れば。はつと斗の御涙貫ぬく玉の如くなり。我初冠の旦より天恩と重んじ。禮と以て上に仕へ仁と以て下と惠み。朝廷に私なしとは思へ共。假令ば晝の螢にて。身にある非とば知り難し。君は天なり罪と天に得たれば祈るべき天もなし。文宣王は陽虎なりとて捕はれ。周の文王は羑里の獄屋に入給ふ。それは對する敵あり。菅丞相には敵もなく。身に犯せる罪もなし。皆讒言の無實の罪。哀れ法皇の御代ならば讒者の舌は爛るゝ共。御聞入は有まじき。恨めしの時代や淺ましの運命やと。御身と詫ち世と恨み盡せぬ今の御涙。一首の御詠ぞあはれなる。流れゆく筏は淵に沈む共君柵となりてとゞめよ。御序で有ならば法皇へ斯奏聞せよと。引れ出させ給ふ所に。京中の童共十二三と頭にて。總卷稚子二三百。手々に梅が枝小松と捧げ御門にわつと泣さけび。なふ悲しや御師匠樣。流しものに成り給ふか。名殘おしやおいとしやと。泣さけぶと官人共追散す杖の下。打れても叩のれても厭はず縋り歎きしは。左ながら孤子の親と慕ふが如くにて。目もあてられぬ風情なり。菅相猶も御涙をはらしや。汝等に一字教し者ならねど。我手振と學ぶ故。師匠と慕ふの優さよ。醫へ我配所にて

死する共魂は留まつて。手習學問の守りの神と成べきぞ。我なき跡にも我願め。無實の難と通るべし是ぞ我記念ぞや。さらば〳〵都人誠の道と神も受け。若も天の冥理に叶ひ又もや歸洛と松が枝に。曇る涙や梅の雨退立の武士に。ひつ立られて去は〳〵と。悄れ出させ給ひける。御有樣ぞ悼はしき。笠見の藏人景村。御隨身泰の兼竹警護嚴しく傍りと拂ひ。はや大物の磯の波うつし乘せ參らそる。舟の屋形にくるでとゆひ。目板とうつて釘付にし息出しの物見より。僅に洩る月日の影。耳に觸る物とては。冲の鷗や磯千鳥夢現ともうつぼ舟。今宵舟出と夕波に沙待してぞゐたかける。御臺は切て此世の名殘詞成共替さんと。悲しき中にも拾ひ子と肌に抱しめ只一人り。道行く人に道問へば。流人いはや二三里も行過たりと聞に付。目くれ涙にまはたるゝ尼が崎迄走り付。尋ん方も波うち際に鎗長刀凄じく。見るもいぶせき籠舟に。鳥獸の生捕か。人間の身のそもやそも。あられふ物の悼はしやと。駐寄給へば兼竹藏人。寄るまい〳〵大事の召人。傍へ寄ば擲殺すと。杖ふり上てぞ咎めける。ヤ、殺すとて厭はふの。我夫の菅丞相に。何科有て召人とは申ぞ。君の爲には御師匠宮仕へに私なく。道と守りし菅丞相理非も糺さず流人となし。屋形へは菅根の朝臣定國などが踏込。頼切たる郎黨の今樊噲と搦め取り。數多の子供も散々に年にも足らぬ。菅秀才敦茂とも遠き東へ追遣れ。親子夫婦が四鳥の別れ。武士よ武士も物の哀と知るならば。一目逢せて呉よとて。濱邊にぞうぞ伏轉び聲も惜まず泣給ふ。恩と受し兼竹見る目に絶るのね。何とがなと思へ共主命といひ相役の。藏人が氣と兼竹が心の内ぞやるせなき。藏人眼に角と立。菅丞相の子供は大人童に限らず。皆別々に引分よとの仰なるに。懷ろに抱きしはいかに水子なればとて。ならぬ事〳〵いで請取んと立寄ば。御臺わつと逃迷ひ。慘や憂や情なや是斗は許してたべ。もと自らが子にてはなく。紅梅殿にて拾ひしが。親たるものゝ習ひにて湯共水共分難く。まだ胎内に有中さへ何ばう尤愛き故にこそ。十月の苦しみ苦にならず。此世あの世の境いと見て。産落したる大事の子。榮耀にも慰みにも捨る親の有べきの。能々の事あればこそ。所も多きに我花園に捨たるは。拾ひ上育てゝ呉よといはぬ斗の自らが。頼む木蔭に漏る雨。の振放して憂目と見せ本の親が聞及び。甲斐ない者に拾はせしと。悔み悲しむ歎さといひ馴れば我子も同じと。死ぬ共此子と抱ながら。殺さば殺せ放さぬぞと。口說立て泣き給へば。兼竹偖は十六夜と我中の子なりしと。思へば不便さ

懐のしさ。御臺所の身に替て御情の忝けなさ。主命だに思はずば身と捨ても勞はり。情の恩と報せん物と此厚恩と送らぬは。畜類に劣りし我身やな奉公の身のはこのなやと。思へば胸も塞りて。漏る涙と包みのぬ目もくら闇と成にけり。情しらずの藏人。ム、拾ひ子と云たらば宥免せふと思ふてこの。よい手なと云まいと引たくらんと絶り付。いや放さぬ〜〜と。抱しめ給ふ御手と取て捻あぐる。兼竹も堪りかね先暫らくと。漸やう押分て涙とうゐめ。某は時平の大臣の御隨身秦の兼竹と申者。偖有難き御慈悲心。あの子と捨し本の親何所に有りと申共。あだ疎のにも存ずまじ。殊に此子故御身と苦しめ給ふ体。誠の親が見聞なば死ぬる斗の悲しみ。御慈悲却つて仇なれば是非御渡しと勸ひれば。ム、聞及ぶ兼竹の御身ならば渡すべし。其替りには情と以て我夫に。一目逢せ給はれと手と合せ給へば。なふそれが叶ふ程なれば。兼竹に如才有べきのと詞に含む涙の体。御臺所は是迄の頼みも力も落はて丶。人目もわのず泣給ふ心の内ぞ哀れなる。ェなまぬるし其兒是へと。藏人片手にひつ摘犬子なんぞと捨るごとく。草村にぞうと投付るは。傍若無人といひつべし。漸やう時ぞと夕潮のさしくる波に舟子共。はや艫綱とと〳〵と櫓械押し立て漕出す。御臺所は聲と上。

是なふ暫し舟人なふ。我とも共に流せよと呼ぶ。招けど叫べ共甲斐も渚の松の風　彼松浦佐用姫が石と成たる憂思ひ。石共なれ木共なれ一足も此處は動じと。立て見居て見伏轉び悶え焦れて泣き給ふ。兼竹樣々介抱し是藏人。我々は陸路の警護斗りなれば。最早歸るが御分は如何にと云ければ。ヲ、勝手次第此藏人は大事の御用承はる。とのれ舟が追付ずば二町や三町は遠矢にも射て呉んと。弓矢手挾み磯邊に添てぞ走りける。十六夜もやる方なく御跡慕ひ來りしが。なふ御臺樣かお尤愛やと縋付て泣く所と。ア、是々泣て居る所でなし。藏人めが早舟にて追駈け討ち奉る手筈なり。某は御臺樣と海士の笘屋に成共預け置。立歸つて藏人と防ぎ止むべし。汝も此子と片付け。御臺所の御先途見よと指添渡せば。ヲ、心得た此度御恩と送らねば夫婦の者は人でなし。屍と此處に晒を覺悟。ヲ、いふにや及ぶ。命も身とも擲つと御臺所と肩にのけ。東西へこそ別れけれ。月も出汐に十六夜は海上と見れば小船一艘。藏人は舳先に立楫取がゐい〜〜聲。ぢぢろ柏子に波と切十町斗ぞ漕出たり。南無三寶兼竹殿は何として遲さぞや。菅丞相と藏人めに闇〜〜と討せては。夫婦の者が義は立ず。よし〜〜千尋八千尋の底もいづさの尼が崎。甲斐なき女なればとて命と捨ば易のり

なんと。抱帶と解て我子と脊に確と締め付。海士のたぐ繩ゆふ襷。小太刀と拔て差のざし。磯打波に飛入て足立つ程と渡り行。みる芽灘屑に纏れて足は遲くて汐早く。次第に深き青海波腰より乳と打越して。肩も浸れば是迄と太刀と口にひつくはへ。逆手とうつてぞ泳ぎける。比は二月春風も肌には寒き海の面。搔わけ乘わけさら〳〵〳〵。さつ〳〵〳〵さつと亂れて散は水玉水の泡。末も果なくそことなく漫々たる和田の原。さしも女の念力の矢たけ心の撓なく。勇みて泳ぐ白波は。花と分行くでとくにて。藏人が早舟に三反斗ぞ近付ける。夫の兼竹立歸り遙のに見れば夕陽の。影は殘つて紅の海と泳ぐは妻の十六夜。しのも子と負ながらて、危うし。我も泳ぎ追付んと身拵をする所に。藏人跡と振り返り。ヤア太刀と啣へて女の海と泳ぐは。必定我に敵する奴命知らず。いで物見せんと弓と矢つがひ。暫し固めてのなぐり放し。のつきと放せば過たず。十六夜が咽笛より背骨とぬふて。負たる子の胸板のけてずつぱと立つ。うんと斗にのり返り浮つ沈んづ二三度四五度。苦しむ聲や磯千鳥磯の方と懐のしげに。我夫なふと最期の詞。血汐に染めて紅の波に死骸ぞ搖れ行く。兼竹今は堪られず。恩の敵我子の敵目前妻の敵。いつ迄助け置べきと。海へざんぶと飛入て一反斗り泳ぎしが。いや〳〵弓矢と持つたれば。又射られては無念の上の耻辱なり。底と潛つて追付んと。水練は心得たり波間にのつぱと沈んだり。藏人大聲上げあれ〳〵船頭。泳ぎ立して陷つて死だ狼狽者。女房に劣たり鵜の眞似する烏やと。舷たゝいて一度にどつとぞ笑ひける。兼竹はやす〳〵と水底潛つて。藏人が乘たる舳先にぬつと顯はれ出ければ。ヤア是へお出なされたの。眞平お助け〳〵と身と縮めてぞ震ひける。透さずひらりと乘り移り取て押へて。いかに主命なればとて。惡事と知らば諫もせず。情知らず道知らず。我朝の聖人たる菅丞相と。害せんとせし其天罰。妻子と殺せし其報ひ。思ひ知れと眞逆さまにひつ掴んで。舟ばりに打付〳〵ゑいと差上。蝸卷波の眞中へだんぶとこそは打込だれ。水と喰ふてあぶ〳〵と浮上れば。櫓櫂と持て打込み〳〵叩き込み。突流されて敢なくも底の水屑と成にけり。船頭も掉取も一時の同類と取ては投込掴んではぶち込。舟差廻り十六夜が死骸は何所と尋れ共。はや引汐に誘はれて其往方はなのりけり。鯨や鯨の餌食と成て屍は波に晒さば晒せ。出來た〳〵古今獨歩の菅丞相。道ある君に奉る命は天地に奉る。八大龍王天龍八部感應納受の誓ひの舟。龍女が成佛海に有る風神水神力と合せ

。菅丞相の在します筑紫の浦へ。寄せよ〳〵寄せ來る波に楫取直し。櫓拍子踏で跡は難波津梅の濱。梅に縁有る菅原の君と慕ひて行く舟に。ほう〳〵ほう法はけ經よむ鶯や。たゞ飛鳥の如くなり。

第三

筑紫さいふが。巾着ならば。博多小梅と腰付に。いよ腰づけに。博多小梅が引く牛も。となど牛とてけなものや。人と突あすば何に成。角に小竹筒の瓢單ぶらり。八十一にて目の疎さ父親乘て孝行の。春の濱邊の野遊に海の面も和波わたり。山は霞の暖のに日向ぼってこそ壽命の藥。永き日脚のべら〳〵と。とのが得ものと牛の聲。もう氣と晴し面白や。娘の小梅牛引とめ。是父樣。左の方は箱崎の松原。春は一しほ青み立わつさりとしてそれは〳〵善い景色。右の方にハ安樂寺の塔の軒端。櫻がやう〳〵火と燈せば。梅がちら〳〵散る風情どうも云はれぬ景なれど。お目が疎ふて花も柳もへんてつもないと。まそつと先で下しまし。慰めませふと云ひければ。父白太夫機嫌能く。いや〳〵此處で一盃したらば善ふおりやろ。八十年住んだ在所。どこに石が幾つ有るも覺えて居る。二三年目は疎けれど皆式盲目の樣にもなし。箱崎の若松も安樂寺の櫻も梅が香も。是此鼻で匂ひとのぐが慰さみじや。さく面白い父樣鼻で聞て樂むとは。夫がはんのはな見じやと輕口いへば。こりや出來た鼻でのぐに依て花見。はなでかぐはなで〳〵。ゥゥ、ゥゥく〳〵 笑ひこけて。牛の脊より轉々々とんと落つれば。ハテおとましや。どこも痛みはしませぬのと。腰と擦り膝と揉む。いや〳〵氣遣めさるな。なんともない盃々吸筒と。骨も堅ぢの堅親父。流石岩木にわらざれば足手弱くも立居して。所は濱邊の瓢單酒幸ひ打身の藥なる。酌つ酌れつ親子の酒宴。白太夫微醉ながら涙ぐみ。偖々和御寮は奇特にも兄めと違ふて孝行な。其心と十分一わの兄の荒藤太に。煎じて成とも呑せたい。種腹一ッの兄弟が誰に似てあの根性あいつが惡と苦に病んで。死だ母の命日に精進でもするとの。立居に親と遣込め妹と責せこめ。大分の田地海山迄はで戯業に仕失ひ。皆人の物になし漸々と殘つた隱居屋敷。二反足らず是とも早ふ讓れ〳〵と責はたる。第一に悲いは此所の流人菅丞相樣。勿体なや悼はしや。埴生の小屋の雨露に打れ。都よりの定にて島中として一日に手一合の養ひ。智者といひ高位といひ斯るお方と悼るは。佛と供養し神と祭る道理。こちの隱居と清め折々の御座所。煎

と茶でも澆ふ入れて慰めませんと用意すれば。大悪人めが邪魔と入れ。流人衰なふ飯米と。博奕の元手に入れたが善い。茶一煎じ米一粒でも與へぬ。所の弊への菅丞相。いつそ殺して退うと吐す。腹が立やら悲しいやら二十若くば彼奴めと。踏殺して呉ふ物と無念なやら悪いやら。五色の涙がこぼるるぞや。此上の孝行に今日の内にも男と持。隠居の家督と嗣でたも。夫では兄の荒藤太が我儘が叶はぬ。和御寮が好た男なら何者でも構はぬ。木竹の身では有まいし惚た男も有る筈。サア誰じや〳〵。當世の娘は十四五のら男欲がり。どふもの卯月なのばの時鳥。名乗つて聞のしやと云ひければ。何嚴業な事斗り尼に成て交ふの。跡吊らふ心入一代男は持ませぬ。去ながら兄様のあの氣では便ないもお道理。京の姉様呼び下し。婿と取て隠居の世嗣に成されませ。いや〳〵京へ上した姉の小松は。如何なる冥加に叶ひしの大内へ御奉公に出。十六夜と云ふ名と下され。内理上臈に成たる由。相應の縁付も都人と結んで出世こそさせたけれ。いのに生れ古郷とて筑紫の果へ呼び戻し。海上は三百里我歳は八十一。登り詰たる老の坂末は一里の半道の。待合せふにも退付ふにも今とも知ぬ命にて。杖柱とも一人の和女一期寡婦で暮そふとは。樂みもない浮世の中。

兄めが常々娑婆塞げと吐すも道理。死んで退ふと牛の引綱たぐり寄せ。首に纏ふて締んとそるとの。のふ悲しや勿体ない。今の間にぞふぞ才覺して。いのにも男持ませふ。死んでばし下さるなと綱奪ひ取り泣き居たり。ヤ、男と持て呉るの。嬉しうおじやる忝い悦びにぞれ盃。それでは酒も一倍旨いと引受〳〵。是男の吟味召るとも。身代も心も何にも撰はぬ。何といふも尤愛さ其方の勝手に。善い比な花と見立て持てたもと。とろ〳〵居歴ふり臥にけり。寝顔と見るにもお尤愛や。子故に苦勞なさるゝな。男持てお心が休めたいと思ふ折のら。爰へ見ゆるは香椎村の新介氣の輕い心よし。結ぶの神の宛ひとはいへ何と言掛ふ。女房に持て下されとは戯のら棒の異な物なり。てんぽの皮厚ふ出ましよと道中に。横に轉りと道芝の露も觸らば落ぬべき。仕掛と見せて待居たり。夫とも知らず行き懸り。ヤ白太夫の娘御の少ふ神酒があがつたの。退いて貰と但し跨げて通らふの。ハテ通り度ば抱起して通つたが善いはいの。ヤ、小むづかしいやあるいと。抱おこを身に抱付て。今日の内に男持ねば親孝行の道立ず。大切にたんと尤愛がろ。女夫じややいのと呼けば。いや此方に先が有る。疾のらそふは言ひもせで。ま些と是は晩蒔の。麥畠の轉寢の其わら麥に馴染て。お

腹に小麥が芽作た。こいつに心中立る故。外の女に逢ふ時は。ちやつと彼方向さやすと。なぶつて振切り通りけり。同じ在所の勘作が急がしげに來る袖と扣へ。是勘作殿たんと其許に戀草の。根も葉も互に知つたゞし。媒いらずの祝言盃なしの口盃。結ぶまいのとはのめけば。忝いが近い比宰府の町へ入聟。惜氣深い女にてすゝ口が綻びて。吐すと皆横島の宰府の町と追出されて此有樣。去れ共未だ手は切れず底振ふて締括り。埒明て談合致さんと是も振切り行過る。あの頭巾着て來るは醫者殿そふなと。すれ寄てなふお醫者樣。私が持病にて獨寢すれば氣が惡るし。今のら頓と夫婦に成り度は外の療治して。夜は女房の匕加減お情あれと寄添ば。いや醫者でない身は外癖女にずんゞ戀た者。召使ひの飲焚の服膏藥に戯ふれしに。吸付て放れず男が有るともがられ。練て〳〵練つめ錢膏藥で扱ふて其借錢のおゞまりが。漸〳〵此比いろ膏藥女子の傍はちり膏藥。ねぶと腫物觸つても下さるなと。足早にこそ通りけれ。御隨身兼竹は風に任する海士小舟。浦々島々經廻りて宰府の濱邊に着けるが。爰ぞ菅丞相の配所如何にもして足と留め。先途と見屆け奉らんと。舟さし捨るみなれ棹。見馴ぬ筑紫の人心何といひよる便もなく。知邊も波の磯馴松影に休らひ居たりけり。白太夫が惣領荒藤太濱傳ひに大聲上。殊々と呼びのけ汝は兄にも知らせず。親父と方々連歩き惡性根と吹込むな。是目と覺しやと引起す唯た今寢入ばな。休ませまして下されと。縋り付と突退胸倉掴んで是死損なひ。今の聲が耳へ入ぬの狸寢入古いぞや。此荒藤太が恐いの。夫程恐い子なぜ持やつた。隱居屋敷の讓り狀はどふしやいの。惣領に讓らひで誰に讓る。火屋へ片足踏込で來世へ持つて往るゝの。菅丞相とやら寒雀とやらいふ。流人めと勞はるとて表替の腰張の。どふで銀と持つてじや。是程身代しもつれて田地に放れ。家質にせがまれ狼狽る子と見捨。流人と養くむ無ぞく心親と云ふも腹が立。ヤア老ぼれ隱居屋敷の屋財家財。釜の下の灰迄讓ると云ふ判としや。いやと云ふと夫切と捻上げ〳〵せつちやうす。白太夫齒囓として。ヤア不孝者日本のあぢやせ太子とは己がと。受た讓りと忘れたの八町と云ふ田地。山斗りも一里四方鹽燒場から網引場。二年も立ぬに棒にふり切ても殘つた隱居屋敷京にも己が妹有り。目の前のあの小梅なんで世と渡らふぞ。妹共が兎も角もせば己に薦はこのづのせまいと。末の末の角々迄心と配る親の慈悲。罰あたりめ業人め。殺さば殺せ隱居屋敷己に指もさゝせぬ。ヱ、小梅早ふ男と持て呉れ。聟があらば此

腕と縛し上て置せふ物。ヱ、無念なと泣叫ぶ其聟々が聞ともない。腕と〳〵れば足はないか。臑骨強ふ生つけたはわでりよの業。臨梅見よとぞうぞ引伏。踏んとすると妹縋つて。兄様是は狂氣ぞ。親と踏む其足が切れて落るが合點か。ヲ身が臑がちぎれるぞ。うぬが胴がちぎるゝぞ。是見居れとはつたと蹴倒し。肩も腰も碎けよとさん〴〵に踏付る。父が覆ひ重なれば拳と上てちやうど打。踏んづ叩いつ泣喚く。極惡見る目も忌々し。兼竹傍のら堪へられず。笠引ちぎり裾端折つゝと入て荒藤太が。兩腕捻あげ濱の眞砂地七八寸のつぱと投込。親子と引立後に圍ひ。氣色こふでぞ立たりける。藤太砂まぶれに成て起きあがり。うぬは何處の簑虫なれば。このけも擇はね親子喧嘩に出しやばつて。此足が戴きたいのと踏にゐゝる。踝掴んで尻居にぞうぞ突伏せ。このけも擇はぬとは疎々しい。色と見て枝と折脉と見て五臟と知る。哥人は居ながら名所と知る。參りのゝつて一家の次第詞の下に推察した。御邊は隱居の跡と欲がる。娘は男と欲がる。其色と見て當分ちよつと出來合の此花聟。女房と土足にのけさせ眞と打擲させて。聟がのめ〳〵見てゐよふの。小眞殿の初見參引出物も持合せず。眞の喧嘩と申受眞の物で小眞持なす賞翫せよと。ず

ばと抜て打のくれば。わつと斗に逃足の砂に踏込み漂ふ所と。遷さず背打砂けふり。眼も眩み臑よろ〳〵起きつ轉んづ歸りしは。心地能りし有樣なり。親子は勇み悅びて。ヲ、何方なれば有難い。危ない所と忝や。お侍の御一盲直に私が殿御じや。ヲ、いのにも聟に取たぞと。踊り跳て取達へ娘は親に抱つくやら。親は娘と拜むやら。撫つ擦つゝ煽ぎ立。悅びあふぞ道理なる。我等は上方寄邊もなき素浪人。當所は猶も無縁なり。お情あれと云ければ。ヘテ聟と云ふら親子なり我は齡もない者。こいつが姉も候へ共海山隔てし京住居。偏へに御不便頼み入る。本名はともあれ白太夫が一字と讓り白國と名乘れよ。若い時の袴肩衣手も通さぬ小袖も有り。惡人の兄めに侮らるな。年寄つて氣が忙しなし。サテく歸つて今日の中親子夫婦の盃。侍の眞に成からは今日より我が侍と。牛引よすれば抱かゝへ乘せて夫婦が兩口とれば。牛も忽ち馬に成。山の薯は鰻に成。喧嘩のさる人聟に成。結ぶ縁こそ不思義なれ。菅丞相と儲けの爲座敷の疊あさ綠り。壁の腰張白太夫が聟取祝ふ老心。手づうら庭の松竹梅の臺の土器小娘が。新お齒黑の口ふれて流石に聟は包めぞも。二世と契りし十六夜が。藏人が矢先にのゝり。大物の浦波の氷屑と消えて五十日。立や立ずに聟入と

は。歎きの上の悲しみの。そゞろに涙は浮めども。此家に足と留てこそ。菅丞相の御先途の御役にもと氣と取直し。ざゝんざ唄へば雁噪出入の者が皺袴。伸して張上濱松の音三國一とゞ謠ひける。やゝ盃も汲み流るゝ蠟燭の火のちらつく風に。誘ひて聞ゆる女の聲。妹々小梅〳〵と表の方に幽のなり。ハテ、今のは慥京の姉様の聲。やれ〳〵お懐のしやと走り出。ヤアほんに姉様何としてお下り。お息災な顔見てお嬉しや。父様も御無事にて明暮の懐のしがり。いのふお色が悪ふ顔に窶れも見へるがお氣合でも悪いの。親の内へ案内所の先お通りと云ければ。永の舟路と鹽風に揉れて何の色も善らふぞ。知らぬ人も有そふな父様一寸呼出してたもやとて。悄〳〵として立居たり。此聲に白太夫京の姉が下つたげな。嬉しい事が重なると。躋蹶〳〵表に出。顔に目と突付て。ヤレ小松の善い所へおじやつたなふ。脇も詰めたか今は名も替つて。出世の奉公めさる身が。輕々しい下り様。此比は打續いて夢に見る。二十日斗以前に其方が死んだと云ふ夢と見て。何ぼう氣に悪つたと。夢は逆夢と心で祝ひ咒ふたれど。起ても寢ても氣遣した。先息災で嬉しい小梅にも聟と取り。今祝言の最中妹聟にも逢ふてたも。なぜ浮々とも召されぬと。言へども猶勇みなく海山隔てし悲しさは。母様の死目も見ず親子は一世の父の顔。見たい〳〵の念力一ッで下りしが。私が死だとの夢と見てさへ左程に案じ給ふ物。誠に死んだと聞給はゞよもお命も有まいと。悲しいは是一ッとさめ〳〵と泣きけるが。なふ夫に付き道すがら淺ましい悲しい物と見たるぞや。年比は二十余りの女子の死骸。背に産子と負ながら。鴈股の大矢にて咽笛と射通され。負ふたる子迄貫ぬかれ。髪は蘿屑に搔亂れ。躰は波に漂ひて汐引時は日に照され。汐さす時は浮み出。浮ぬ沈みぬ搖れ來て。今此濱の岩波に打寄せられし淺ましさ。如何なる人の死骸ぞと。見れば映る水鏡の。我顔と死骸の顔と打並び。偖もよふ似たると面差聲のゝりより。小袖の摸様に至る迄。父上の御覽せば姉が死骸の悲しやと。縋付ての御愁歎思ひやられて悲しさに。斯くは知らせ申ぞとよ。妾は無事で居ると思ひ必歎のせ給ふなよ。あの死骸と引上させ矢幹と抜いて子と引分け二筋の煙となし。跡吊ひて經念佛の一遍も。回向なして給ばらば其死骸の成佛は。皆自が功德にて親兄弟の利益ぞや。お年寄れし父上に。久し振にて娘の便り善とも聞せませぬ。許して下され父上と。語りも敢ず泣きければ。父も涙に曇り聲ぞふやら其方の物語は。胸に答へて無上に悲しう成て來る。望

の通り死骸も上て吊らはせよ。妹が一世の祝言機嫌よふ妹聟に逢ふてたも。ア、聟殿にも逢ひたいが此顔見せんも耻かしゝ。先母様のお位牌が拜みたし死骸と早ふ上てたべ。頼みまするとは泣きければ。ヨ、心得た出入の者。若い衆雇ふて死骸と上。姉が望と叶へて呉れ持佛堂に火と燈さふ。つゞくり普請はしたれ共。勝手は前に變らぬ草鞋脱で奥へおじや。位牌拜んで綏りつと祝ふて雑煮もすはつてたも。小梅姉が下つて嬉しいの我も嬉しいわいと。妹打連れ奥に入。今は此世に亡き人とも。白髪頭と打振て悦ぶ親ぞ哀れなる。兼竹耳ゝと側だて聞けば聞く程死骸と云は。妻の十六夜優くも。此屋の姉は余所の歎きと憐れむのと。差覗けば似るまでもなく十六夜なり。はつと斗りに表に出近付よれば其姿。掻消し見へず成にけり兼竹は惘然と。偖は我懸しと思ふ心に映る幻の。左もあれ姉御の姿もなし。是は如何なるとやらんと。暫し途方に暮けるが。アヲ思ひ當たり京に居る姉娘とは。十六夜が事なりけるの。不思義の縁の廻りやに矢鏃にのゝりし親子の死骸。未來の苦患と通れん爲親兄弟には形と見せ。正しく詞と替せしのや。夫に何の恨有り暫しの詞も替さぬぞ。懐この しの女房や。責て稲妻石打火の影程なりとも見へて呉れ。何所へ消て失けるぞ露と消なば草葉に殘れ。霧や霞と成ならば暫しは空に棚引と。天に仰ぎ地に轉び草と掻分〳〵て。やれ十六夜よ女房よと塵芥の中迄も。索し泣こそ敢果なけれ。夫の歎きに亡魂も憧れ出て。なふ兼竹殿〳〵と元の座敷に顯はるゝ。ヘア其處にかと走り入縋らんとするに便りなく。有るか無のに手に障らず又伏沈む斗なり。敢なき聲にて目には見ゆれど形はなく。影のごとくの我身なれば撫へて寄添給ひそよ。夫の戀しさ床しさは親兄弟に増れ共。我死たりとの給はゞ父の歎きの最惜さ。暫しは隠れ參らせし。幽靈の身なりとは親兄弟に隠してたべ。女の身の矢鏃にのゝり。產子諸共死したるは。もちでもりも同じと。八かんの大海に浮き沈む憂思ひ。今にも死骸と見給はゞ。水にほとびて色變り髪も飾りも拔散り。淺間しくも悒憤も懸し床しは引替て。愛想盡ん情なや。思へば〳〵何事も昔ぞやと掻口説泣ければ。なふ愛想が盡んとは曲もなし。うるさい形にならばなれ。今一度身体に魂立返り。夫よ妻よといふとは成まいの。いやなふ二十四時過ぬれば。守り本尊の壽命の札と削られて。冥官の帳に載る故に。二度娑婆へは歸られず歎きの聲の奥へ聞へ。父に斯と知られては親子の絆にからまれ。影も形も消うせて最早詞も替されず。聲ばし立て下さるな。泣てばし

下さるなと。いへば夫も歎くまじ聲立まじと兩袖に。口を塞げば噎返り五躰を悶へ浮岩る丶。心ぞ思ひやられたる。斯る所に在所の者死骸を上て候と。戸板ながら舁入る父も妹も出向ひ。偖悼はしや何所の誰のは知らね共。姉に似たる此死骸身に染々と悲しさは。他生の緣こそ有つらめ。なふ聳殿御不承ながらお侍の役。あの矢を拔て母と子の。體を分けてたべといへば。侍の役と云ふ詞に心を耻しめ。あつと答へてつゝと寄り。見れば我子我妻の形はあれ共魂なければ物言わず。魂は傍に立添て物はいへ共形なし。親兄弟はそは知らず知たる者ゝ我子。知つて夫とも明されず。こゝそも如何なる因果ぞと。目もくれ心亂るれど叶ゝぬ物と矢幹を掴み。引ても〳〵去やくつても。潮に矢の根錆付て。皮肉纏ふて拔ばこそ。骨に觸る苦しみの魂にや答へけん。捻廻せば身を悶へ捻ぢて引けば身を縮め。身を震ゝせば我が手もふるひ。腕の力も弱りしが。歎きに眩む目を閉ぢ。南無阿彌陀佛と引拔けば。親子の躰さつと分れ。含みし潮疵の口より流るゝ。何に譬へん秋の田の井出と切たる濁り水。涙ゝ筧の如くにて目も當られず哀れなり。兼竹包むを包まれず。二人の死骸に抱き付。わつと叫び伏けるが大聲上て。何と隱さん是は我子我女房。もと某ゝ時平の大臣の御隨身秦の兼竹と申す者。妻は大内舞姫なりしが。忍び寢に此子を儲け障り有て捨ける。菅丞相の御臺所拾ひ育て給ひたる。情の御恩の菅丞相を。配所の道にて害すべしと。傍輩笠見の藏人。主命と蒙つて早舟にて追駈る。甲斐〳〵敷も此女。藏人を防がんと。此姿にて海に飛入餘さじ遁じと追ひくる。放逸無慚の藏人よつ引てはたと射る。矢ゝ此矢體ゝ是。矢幹も體も目に見れ共。心ゝ人目に見へざるが。無慚や可愛や心の中いふ斗悲しのりつらんと。涙に暮て幽靈の貌と泣く〳〵見上れば。なふ其時の心とて身の悲しさゝ數ならず。共に射れし子の尤愛さ名殘惜さゝ取分て。一人ゝ父一人ゝ夫責て最期の念佛も。潮に咽び絶入て海ゝ三途の川波と。漂ふ體も斯くいふも。今ゝ世になき十六夜ぞや。名殘惜の人々やと。ゝつぱと轉び泣さければ。偖ゝ我子ゝ姉上ゝと抱き付ば目に見へず。ぱつと消て後ろに有り。夫が追れば爰に消え。父が寄ば彼處に立。見へつ隱れつ忘執の雲に隱れて失ければ。聳も眞も妹も敢なき死骸にひし〳〵と。抱き付〳〵聲と限りの叫び泣。物の哀れと留めける。白太夫足摺してやれ〳〵可愛ひ事とした。苔む花と先立て此七十八十の長命は何事ぞ。めでたい壽命あやゝゝり者と人の云も僞り。子と先立て目出度いう。愛

目と見よとの長命の。死したる母ゝ果報もの。殘りし父ゝ業人。神にも佛事にも恨有り。罪なき娘と殺さんより。罪業深き此親なぞ取殺し給ゝぬと。前後不覺に取亂し嘶ち歎くぞ道理なる。兼竹思ひに暮ながら老人の氣と勇めん爲。わざと聲と荒らげ。ヱ、詮なき歎きのな子と先立しゝ御身斗の。十六夜斗が娘にて妹ゝ子ならずや。殊に菅丞相の御身替り同前の死に。何不足の倭べき。見苦しき二ッの死骸早葬るこそ亡者の爲。そこ退給へと在所の人々語らひて。兎角まつらふ無常の門出。夫婦一期の名殘ぞと。共に手と添肩と添。見返る我も見送る親も。互の心はぢらひて。目にゝこぼさぬ胸の中。一村雨と搔曇り降るゝ涙や。南無阿彌陀發菩提心。往生ゝ安樂寺へと送り行く。誰のゝ知らせ參らせけん。遽たゝしげに菅丞相。御來臨まし〳〵。やあ〳〵白太夫汝が娘ゝ我故命と取れしとや。時平の大臣一人の讒心より。餘多の人と損なふと恨みても余り有。我此譬と報せん爲。天帝に祈誓し大威德明王の法と修し。時平と亡ぼす大願有り。汝が娘の敵とも共に取て得さすべし。不便の者の有樣やと。御袖と顏に押當て御落涙ゝ堰敢ず。はつと斗に白太夫頭と地に付。冥加に余る御吊らひ。娘が命と捨ずんば賤しき我等が此耳に。御直の御意と聞くべきの。小梅歎くまい悲むまい。是皆姉がお落ぞとそゞろに涙と流せしが。暫しも愛ゝ穢れたり。何がな清めの御座所と舟の碇の大綱と。たぐり丸めて圓座となし仰ぎ請じ奉る。末代に至つても綱敷の天神とゝ此御姿と寫すなり。このゝつし所に荒藤太。厄神の荒たる如き面魂。草苅鎌と引さげつゝ〳〵と入て。菅丞相のし〳〵と落着て居らるゝな。是親父今日ゝ妹に聟取さゝんざが有と聞。祝ぶて此手稱生臭物にゝ鰹節の替りに。掴拳持參致せしに聟ゝ見へず菅丞相。昨日の聟ゝ間に合にてはんの聟ゝ丞相の。昨日の間に合めに善ふ背打に討したなあ。刀脇指賣喰ふて讓りの刄物ゝ鎌一本。是と頼むでなけれ共。丞相出てうせふ。但是で元首苅てくれふのと。鎌閃かし動響ける。菅丞薨く御色なく。愚人に向ふ刄もなく。答ふべき詞もなし。一首の哥にて汝等が。太刀も矢先も受とひると是見よと。ぢ〳〵と庭におり枯木の下に立寄て。東風吹ば匂ひとこせよ梅の花。主なしとて春なわを忘れそ。切つて見よ打て見よと。の給ふ所と心得たりと打て懸れば。不思議やな俄のに東風風枯木に落て。百千の枝々に白梅一度にはらりと開け。菅丞相の御姿いづくに有共。白雪に埋むが如く引包み。夫とも見へず成給ふ。藤太呆れて彼奴ゝ魔法と行なふのと。持た

る鐘と投付れば。二ッに折てぞ散たりける。所詮恨ん父めに有り踏殺して埒明んと飛こゝる。妹の小梅わゝり付。ェ、畜生め喰付て呉ふ物とまがみ付と。片手に掴んで床柱にはたと打つくる。其隙に白太夫むく〳〵と起上り。ェ、口惜しや子ん三人持たれ共。男子ん汝一人。子ん生いで敵と生だか。迚もうぬに殺さるゝ。唯ん死ぬまい一組くんで死んで呉れふ。ャァうせふと手と廣けて待のくる。藤太のッら〳〵と笑ひ。ャァ志やらな蚊の脚はき〳〵折て捨んずと。手ぐとね引てぞ悪りける。父と悲しむ十六夜が魂親の頭と守つて。百人力の孝行力不孝の眼に見へばこそ。小指の先と侮ぞつて持て來ると。ャこれゝいな突てくればャまッのせぞつこい。割木の様なる腕節掴んで引廻せば。くる〳〵〳〵小山の様なる大男。痩骨親父が大腰に引懸られてたぢ〳〵〳〵。ェ、口惜い年寄骨に負うのと。汗と流して力瘤ゑい〳〵〳〵とぞ揉合ける。人界離し勇猛力に。天地の加護力加ゝつて。何かん以て堪べき。雲雀の様なる腕先に大の男が眞仰のけに。地響き打て打倒され。胸板に乘懸るん。大盤石にて壓るゝ如く足手と悶くぞ心地よき。やれ小梅刀よ太刀よと喚け共。折節邊りに又物ゝなく是ゝ〳〵と騒ぐ所に。十六夜形と現ゝして藤太が髻むんずと取り。我身ん足と逆まに雲と踏んで引上るゝ。天より釣たる如くなり。御隨身兼竹涙ながらに立歸り。斯と見るより走りより勸善懲悪殺生なしと。太刀抜放し飛上り〳〵。づた〳〵に切て切り落せば。屍ゝ散て十六夜がありし姿ゝさらばと斗り。消え〳〵として失てけり。梅花開けて菅丞相安全として顯ゝれ給ひ。悔むな恨むな人々よ。忠孝ん天地の味方。不孝不忠ん日月の大敵なれば。罰利生外より來る所もなし。我身ん此に有明の月の都に現はれて。誠の道と照そと見よと教へ〳〵て還御なる。草木心なけれ共。三十一字に飛梅ん誠の道のまるしなり。

第四　御臺所道行

世の常に世に言觸し。世の中の浮世の憂きに彌増て。我身一ッの浮世とん。何と筆にも詞にも。思ひと逃ん菅廷。菅原の御臺所御子秀才敦茂君。父の歸洛といつゝんと。待につれなき初鴈の。故國の空の遁きも。通へば通ふ旅衣。下部の賤がびそのなき。賤機帶のうた結び。人目と包む朝霞。東寺四ッ塚烏羽繩手。淀の川瀬に着給ふ。一年我夫の諧歧の任の下り舟。錦の纜らんの楫桂の棹の舟哥に。やらんやら目出たいな。枝り榮ゆるのんゑい

〳〵。木の葉も繁るゝ夢よ水の泡。淀みつ流つ行末に。何の頼の有て行く。此身ならぬど水無瀬川命ぞ責てたのら寺。うゑの丶葦のはの見ゆる。江口の里の仮枕。こゝりの契りの憂ふしに。夕べゝ今朝のふるとと。長柄の橋も名のみにて。難波のうらみ數々ゝ。筆にもいあで住吉の。岸打波のとのれのみ。碎けて物と思へとや。末はあしやのうら傳ひ。海士の漁火ちら〳〵と。星の螢の影うすく。月にぞ早く鳴尾崎。和田の岬の車舟。浮世とめぐるためしかや。おりゐる雲ゝおりもせで。それより落る瀧の糸。たが布引と名付しや。生田の川に身と捨し。稚子乙女が名のまるし。とへば涙も我袖に。もりの露草秋とだに。吹敢ぬ風に色替て。ぬれて妻戀ふ小雄鹿の。つのゝ松原蔭暗く。暮ぬさきよりまづ暮て。こやのあしぶき宿もなき。我とば呼で誰とのも。ア、呼子鳥鬼束な。關ふき越ると詠じけん。須磨の鹽屋に心なき。海士も慰さむ月花の。まはきに櫻折殘し。月漏れとてや板庇。やさしふきさしまばら成ちん。名所〳〵と書き寫し。一目に見よとゑじまが崎。淡路島山島がくれ。今も名殘のはの〳〵と。明石の浦の朝ぎりに。山もと遠きゐなみのや。室ゝ人目も繁しとて。播磨の國飾磨の浦よりお舟にめされて。豊前の小倉につき給ふ。是より陸路に打なびく。柳が浦の柳がみ。我黒髪も結ひもせず。とかぬ櫛田の神ならば。人の愛さも知らぬ火の。筑紫の果に迷ひても。あればある世の命とて。いきの松原打過る。宇佐八幡に世のうさと。つげて守れと伏拜み。なぎさの濱の浦千鳥。葦邊の田鶴も子と思ひ。妻と思ゝ我夫子。我友鶴と引つれて。共に千歳と松浦川。何思ひがゝ染川や。朝倉山や木ノ丸殿。苅萱の關文司が關。越つ渡りつ渡りつ越つ。此日の本の國の果。唐土もはや程近しと。聞ば心もくれかゝる。入日の影と知邊にて。戀しき人にあふ迄の。齢と玉手箱ざさや。太宰府にこそ。

天づくし

抑筑前の國天拜山ゝ九州一の高山。巖峙つて鋭き劔の如く。道めぐつて羊の腸に似たり。峰にゝ老松枝聳へて朝一片の雲にむせび。谷にゝ瀑川石流れて夜孤林の月と碎く。空飛ぶ鳥木傳ふ猿の聲もなければ。まして樵夫柴人の行通ふべき道もなく。平地と離るゝと遠く。天に近き心地なれば。天拜山とゝ名付たり。御悼しや菅丞相。今に於て歸洛の勅諚なのりしのば。御憤り骨髄に徹し。罪なき趣と梵天帝釋に訴たへ。鳴雷の神となり。

讒者時平と蹴殺さんと。一通の告文と書て文杖に差挾み。湯水も更に斷食の。天拜山の頂きに足と蹈て。三七日夜眠らぬ兩眼魚の如く。天に向つて大音上げ。肝膽碎き御祈誓ある。それ世界未だ開けざる始めゝ。渾々沌々として鳥の卵の如く。重く濁れる物ゝ。つゞき塊りて國と成。輕く清る物ゝ棚引き上つて天と成。欲界の六欲天。大毘沙門天持國天。增長廣目國土の惡鬼天の邪鬼。各二鬼とふみ隨がへて四王天に立給ふ。兜率天にゝ四十九院。色界の十八天。梵衆梵輔大梵天。少光淸淨無量天。無雲天にゝ雲もなく。無熱天にゝ煩らひなく。無熱天ゝ熱のらず。是れ天人の住家にて善現善見色究竟。有宗の十六經部の十八。三十三天見そなはし給へ。千早ふる神ゝ自在の德と現じ。雨ともなり風ともなり春ゝ八雲や八重霞。柳ゝ綠花ゝ紅皆初春の神委。靑帝と號して東方の天に立給ふ。夏の神ゝ炎帝とて。民と養なふ天の河と早苗の水に堰くだし。國と賑し悅び祝ひ給ふ。故に祝融神共申て。南方の天に立給ふ。秋ゝ少昊西天の御神。冬の神ゝ北方の天に立給ひ。元英神と申とのや。雲井はるけき高天が原にましますゝ。眞如常住實相中道の御神躰。天の御中主の尊と申奉り。月よみ日よみ。風の神雪よ霰よ。偖ゝ露霜又雨の神。雷稻妻電神明和光正直の人と照して。壽福諸願滿足をと聞のらゝ。天心疑ふ所なし。僞り曲れる讒者時平がたゞ中に。神罰の鏑矢一筋放ち給へ。なのんづく鳴雷の神ゝ是。伊弉諾の尊八束の御劒とひつ提。火の神のぐつちと切給ひし時。顯ゝれ出し雷の神。今菅亟相が無實の罪に沈んで恨みの念力。切々刺々として切が如く刺すが如し。抑八くさの雷といつば。頭に有ると大雷。胸に有ると火の雷。腹に有ると土の雷背に有と稚雷。隱に有と黑雷手に有と山雷。足に有と野の雷。陰に有ると裂雷。我命今日に限れり。五体髮膚此儘に。八色の雷と成て。十六万八千の眷屬と進退し。とゞろ〳〵と九重の。八重立雲と踏とゞろかし。鳴渡り讒者時平が水にも入れ。土とも潛れ頭の上に落のゝり。摑んで三段に引裂捨。我に變のりし卿相雲客一々響と報ずべし。天傾ふのず地破れす。乾坤是誠あり。我心僞りなし風應誤まり給ふな。菅原の道眞謹み〳〵敬つて申と。天に攀けと奏せらる。梵天帝釋納受にや。異香薰して白雲一村蜷卷下ると見へけるが。願文と捲取て九天高くぞ上りける。偖ゝ大願成就と御悅の其中にも。年月配所の御物思ひ三七日の斷食に。心身疲れ果て給ひ。結迦趺座して眠るが如く。延喜三年二月二十五日。御年五十九歳にて左遷の雪と消給ふ。

悼しのりける次第なり。白太夫親子兼竹御臺若君案内し。天拜山に攀り巖高く見上給へば。座せるが如くましませ共。はや御色も面變り。生共死共見へ分ず。悼しの我夫や懐しの父上やと。登らんとすれど便りなく。二十余丈鉄と削つて立たる如くにて。神變ならでハ登り得ず。貴て古郷の妻子のと詞と替させ給いぬのと。人目も分ず泣給へば。兼竹夫婦白太夫我身の御恩ハ申に及ず。君ハ世界の寶なり。今一度御歸洛の時節とも待給ハず。鳥も通わぬ岩の上に食事と絶て敢なく終り給ふのや。天下の鏡曇るかと五人の人々狂氣の如く。巖と叩き岩根と巡り息とばのりに泣叫ぶ。道理とこそ聞へけれ。斯る所に倶利加羅太郎今樊噲。獄屋と遁れ夜晝わのず走り付。見るより早くこハ何ごとぞ淺ましや。身の筋とぬのれ。獄屋の憂目と凌ぎしも無駄とか。ヱヘ言甲斐なき此有様いで抱下し奉つて。都に歸り直奏申し。協ハぬ時ハ御供して唐土に渡り。唐の軍兵と以て攻寄せ。時平ハおろの延喜の帝にも泡吹せんと。登らんとすれ共手がゝりなく。苔と踏バ足辷り。蔦と掴めば根もきるゝ。詮方涙に樊噲も。ヱヘ情なき我君やとどうと伏てど泣ゐたる。荒人神の靈なれば御目と開き立上り。珍らしやのたゝ我罪なき趣と奏するハ易けれ共。君の誤りと臣として糺せに似たり。されば共一念雷となつて讒者の恨と散ずべし。其後秀才敦茂儒業とついで菅家と興せ。我都と出し時京童に契約有り。天が下の稚き者手習學問詩歌の道の守り神。身の憂數にたくらべて。我と信ずる輩ハ。無實の難ハ遁べし。さらば〳〵との給ふ御息。赤白二ッの虹の棧橋雲に飛入うせ給ふ。人々ハ有難さ名殘惜さも彌増しに。空と仰ぎてわつと斗泣より外のとぞなき。倶利加羅太郎涙と啜つて。雷と成て時平めと掴み殺さんとハ心地よし。今樊噲共謂れし身が。雲の上にて主君のどろ〳〵鳴給ふと。下人の身にて桑ばら云ても居られまじ。我も一念眷屬の雷と成て。讒者の一類掴み殺し蹴殺さんと突立て。岩角に頭と振てこう〳〵くハん〳〵ひつし〳〵と打付れば。腦も鉢も打碎けかつばと伏て死しけるが。俄に山鳴り谷叫び車輪の樣なる光り物。胸の中より舞出て。都の空へど飛去りける。數さながらも若君も斯る奇特と見るのらハ。猶御遺誠違へまじ。文學の道闘まんと安樂寺に標と立。人々伴なひ都路に思ひ立ちけり。秋に後るゝ老葉は。風なきに散やすく。愁と吊らふ涙ハ。問ざる袖に先脆く。落て流れてみつせがハ。沈み果にし泡方の哀れ女の敢果なきハ。今生に營と晴さねば。死して五障の雲厚く。我ハ無明に迷ひなが

ら。叩く扉ハ法性坊の軒端に白き月影も。我名も十六夜と名乗とも人知らじ。只物申さんとぞ音づるゝ。されば此法性坊の僧正ハ延暦寺の座主。菅丞相の御師範にて知行尊とく在せしが。西坂本の別業に九識の窓の前。十丈の床のほとり瑜伽の法水とたゝへて。三密の月ハ指ぞ軒の戸と叩くべき人も覺えぬに。松吹く風の響きのと戸と開き見給へば。いや四方に風なき浦波の。音にも聞き給ふらん。菅丞相の御恩と受御身替りにたつの弓。矢先に命と失なひし十六夜が魂魄是迄顯れ來りたり。恨みは時平にあら人神の君雷となる神の。我も眷屬にならんとハ思へ共。生と變ても女の身ハ天に到ると叶ハず。變成男子の法力にて。男の現果と得させたばせ給へとよ。あら怪しのらずや。變成男子ハ成佛の法。雷も魔障なり魔道に導く法力なし。はや立されと夕紅の。緋色の衣引とめて。縋れば拂ふ露の間も。語るな聞じ忌ハしと。あひの襖戸とはたと瑣し。無人城とて音もせず。女ハ恨みの顏面にて。あらうたての御僧や。若作障碍卽有一佛魔境と說り。雷も魔障も何佛法の外ならん。佛法の力にて雷に成がたくば。大天狗と成べきがそれも女ハ叶ハぬぞ。恨めしやうれなき塵りに咎められつゝ。とのれ敢果なき祈り加持して物怪退るハ世の常に。我苦しみハ大びるゝや横川の杉の梢に住て。御法の敵と身ハ成て。今此塵も同じ恨に。苦患と見せんと思ひ込。思の外に怨念積みて魔道に沈まん苦しさと。いふのと思へば更行くよるハの。杉の嵐に立紛れてゞ失にける。猶深更の丑の時又も扉に音するハ。窓うゝ雨の音にもあらず。以前の女性の來るよと。空寢入して聞捨れば。さきりに叩く月下の門。山影門に入でとせ共出ず。月光地に敷て拂へ共又生ず。槇の板戸と押開けば過にし二月や。末の五日に筑紫宰府にて世と早ふ去給ひし。菅丞相にておはします。怪しながらも此方へと請じ入奉り。深夜の御光臨何事にのハと有ければ。菅相答へて。の給ハく。君暗のらずと申せ共濁れる世に生れて。無實の讒言力なし。讒臣の譬と報せんため。鳴雷と成り内裡に飛入。我に憂のりし奴原と蹴殺すべし。其時僧正召の勅使立つとも。攝へて參内候な此事頼み申なり。御頼み切なれば譬へ宣旨下る共。一二度ハ參り候まじ。いや〳〵宣旨度々重る共必參内在ますな。叶ぬとなの給ひそ。如何なる勅使なり共二度迄は參るまじ。勅使三度に及ばゝ普天の下卒土の内。王土にあらずと云となし。違背ハあらじと有ければ。菅丞相は怒りの氣色折節本尊に。柘榴と手向置たるゝと追取り。口に含

んではら〳〵と嚼碎き、稜戸にはつと吐懸給へば。柘榴忽ち火焔となつて三尺斗燃上る。僧正騷のず酒水の印と結んで莞字の明と修し給へば。火焔は其まゝ消てけり。恨は世とも人とも思ひ思はず。もとは師弟の契りと捨現世の望み空しくば。未來の引導頼みがたのゝのりそめながら。恐れて七尺去るは師の影。去で其儘、有明の。十六夜爰にと又現はれて。あら物々しいのに僧正。今更何の觀念とかなせる。我は師弟にあらざれば。何の好みのあら恨めしや生て此世に置ばこそ。内裡に召るゝ恐れあれ。我境界の友鳥同じ闇路に來れや來れ。我玉かづらくる〳〵。くる〳〵苦しき亂れ髪。風に吹ちる菅原や。菅丞相の怨怒の相好。さも凄まじき眼は日月。梅花は輝やく星の三光。僧正護法の數珠の水晶降魔の利劍。此處にひらめき彼處にちらめき。ぱつと消えてはぱつと現はれ。とう〳〵とう〳〵なるは川音瀧のこゑ。東風吹かせに東と見れば山王權現。南に八幡岩清水。西に松の尾北には加茂の。山風神風さつ〳〵さら〳〵。さら〳〵さら〳〵さつと吹拂はれて。晴る横雲八聲の鳥に。恨はつきじと云ふ聲耳。影も姿も夏の夜や殘るは法の燈火に。空はの〳〵とぞ明にける。末世の今に至る迄。此敵山に留まつて法性坊の燒妻戸。佛法不思議の大行力。神は自在の神通力偖こそ柘榴天神と。仰ぐも法の奇特成る。

第五

比は延喜五年六月二十五日。北野の方より黑雲起り。内裡の上に覆ふと等しく。電光天地に霹靂して世界も滅する大雷鳴。丑の刻より己の刻迄刹那も止まず鳴はためく。帝と始め百官男女の別ちなく。此處に轉び彼處にころび。耳と塞げば電光眼に燒鉄さす如く。聲と力に桑原〳〵。雲雷鼓聲電念彼觀音。腑と隱せと泣叫く前代未聞の天變なり。天文の博士三好の清貫召るれば。大床に易とひらき。乾は元にして亨る。貞に利わりと。繰出せばひつまやり。乾兌離震巽子丑寅と繰出せば。ごろ〳〵〳〵そりやこそと耳塞ぎ。聲もふるひ手もふるひ。震ふは震の卦。雷百里と動のすと。八卦やらもつけやら。性根の有はなのりけり。大膽不敵の時平の大臣少も騷がぬ風情にて。こりや狼狽たの清貫。鳴らぬ物が鳴るにこそ。陰陽相迫つて雷も鳴が役。博士は是と占なふが役。胴と居へて考へよと睨つくる眼の光。いなびのりより恐ろしく。心と鎭め一々に占ひ考へて。横手と打今日の雷は乾の卦に當つて候。九五は帝上九は師匠の位。當時帝の御師匠は菅丞相。上に立べき天子の師

匠と流罪せられ。配所にて薨給ひし其靈魂雷と成て。祟りとなし給ふ所疑ひなし。是と宥られんには又菅丞相の御師匠。法性坊の僧正と召て加持せられ候はゞ。いのに憤り深き菅丞相の靈魂なり共。師匠に背き給ふべきこの。はや疾々とぞ奏しける。君甚驚このせ給ひ。右中辨希世宣旨と蒙り急き勅使と立らるゝ。雷鳴は猶鳴りやまず。洛中洛外四方の空は晴渡り。たゞ内裡の上斗り震動するこそ不思議なれ。程なく希世立歸り。法性坊に宣旨の趣相述候といへ共。存る旨有に依て今日の參内は御免あれとの勅答なりと。云も敢ぬにいな光。希世の上にはためきこのゝり。五体燻り死給ふ時平彌々慌て騒ぎ。ェ、其法師めぞんざい者。御免と云ふも事による。御祈禱料の寺領のと下さるゝは何の爲。重て屹度召るべしと大納言清貫に言含め。又こそ勅使立にけれ。時は數刻に及べ共空晴ねば日影も知らず。一日一夜の雷電に卿相雲客氣と失なひ。法力頼む斗にて法性坊の參内と。今や〳〵と待所に大納言馳歸り。勅諚の通りいの様に申ても。風雨の中に老僧の身是非に參内御免あれと。固く辭退に候と申す詞も終らぬに。電光ひらめき落のゝつて。あつと斗の一聲に焦れ死そるぞ不思義なる。時平怒つて齒噛となし。菅根いなきこの。定國〳〵と呼ければ、物の角より兩人ふるひ〳〵立出る。法性坊の僧正二度の勅使と背く條。奇怪千萬此上ゝ兩人召の勅使として。隨分賺して同道あれ。若三度の宣旨と背きなば。出家といはでな繩と懸けて引立べし。はや急がれよ早ふ〳〵とせり立れば。こは〳〵ながら兩人は西坂本へぞ急ぎける。博士も我身空恐ろしく。料紙四枚の札に認ため。曾陀摩尼須陀光。阿伽多剎帝魯と書記し。是ぞ秘密の御守。御座の四方にとし給はゞ。雷の恐れ候はず。なと〳〵私宅にて丹精こらし申さんと。云捨罷立ければ。上臈達殿上人悦びいたゞき。是さへあれば法性坊にも及ずと。御殿の四方に貼付れば。以前に增さる雷鳴詮方なふぞ見へにける。定國菅根勢ひのゝつて馳歸り。法性坊只今是へと云ければ。上のら下迄力と得法座と擣へて待給ふ。斯て僧正辭退申せば勅に背く。參内すれば菅丞相師弟の情知らぬに似たり。二ッの境と佛意になげ打。紫震殿に座し給ひ數珠さら〳〵と押揉んで。眞讀の普門品千手の陀羅尼と繰掛〳〵祈らるゝ。雷電殿に願はれ見へて。御殿も搖ぐ大音にてあら愚の僧正や。我と見放し給ふ上は僧正とても恐るまじ。時平が虎口の讒言にて。無實の罪に沈んだる怒りは更に晴やらず。時平と取て摑み裂き。定國菅根と蹴殺し我に愛のりし奴原に。報ひと思ひ知

らとべし。僧正の身の上は除ん〳〵と思へ共。春屬の雷神多ければ。過ちして恨み給ふなと。春屬引つれ雲と卷内裡の四方と鳴巡る。いや僧正が命と取る〻共。祈り鎮めで置べき。のと。猶も揉のけ祈らる〻。實にも師弟の禮儀とて。僧正の在する座は。恐れて鳴ぬぞ不思義なる。紫震殿に僧正あれば弘徽殿にのみなりとる。弘徽殿に移つり給へば。清涼殿にいのづち鳴る。清涼殿に移り給へば。梨壺梅壺。夜の御殿壽の御座行違ひ行巡り。震動雷電稲光法力念力我劣らじと。祈るは僧正鳴るは雷。揉合〳〵鳴つ祈つ〻揉合給へば。流石の時平も怖わな〻さ。肝魂も身に添ず。命限りと逃まはる。定國菅根は腰抜て。よろり〳〵と這まはる。恐ろしなんぞも愚のなり。二人は逃るに力も盡さ。東西のはしのくしに身と屈め居たりしが。二ッの雷孫庇に落の〻り。二人が上にどうと落ち。ずん〳〵に掴み裂雲中に駈入りにけり。時平我身一人に迫り詰たる報の業。免させ給へ菅丞相と天と禮し拜しても。何處に遁れん樣はなし俄に土にも入らればこそ。なふ恐ろしや如何せんと。呆れ慄き立たりしが。ヱ、思ひ付たり。彼の桐壺の井のもとは。神泉苑迄堀抜に水の通ふ抜道あり。是と潜つて土の底に。三日も五日も有るならば。如何なる雷も叶ふまじ。命の親の井戸樣やと井筒に手と掛け飛入て。こ〻ぞ一世の大事ぞと水筋に任せ、土と潜て逃て行く。雲は是に從つて虛空に布と引く如く。七八町も退駈しと見ゆれば。稲妻火焔とまき。鳴動頻りに落の〻り大地と二ッに蹴破て。難なく時平とひつ掴み雲と凌ぎて上りける。時平は宙にて手足と張り呻き苦しみ手と合せ。泣悲む處と兩足掴んで。二ッにさつと掴み裂。雲井遙のに入給ひ。終にげんぢやくふはんにんの敵は亡び失にけり。黒雲さつと晴渡り日輪光り明らけき。帝は菅家の一家と召れ御悅有所に。雷神形と顯はして。昨日は北闕に悲みと蒙る士と成。今日はせいとに耻と清むる屍と成。生ての恨み死しての悅び。共に我といのん。今須らくくわうきと守るべしと。の給ふ息は金色に南無天滿大自在天神と。九字の文字に顯れ。異香花降り光りと放ち。音樂天に響きけり。雲は錦の帳と覆ひ。文字は則束帶の御正躰。尊とくも老松飛梅色香と添へ。生るが如くに拜る〻。右と左に春屬の雷火變じて燈明の影も曇らぬ神と君。正一位太政大臣の贈位贈官。目出度も北野に一夜の千本松。一本に千年づ〻數へ重ねて萬々歲。威と增し智と增し齡と增し。壽福ます〳〵太平國。御子孫繁昌家繁昌。五穀豊饒の國民と。守る神こそめでたけれ。

天神記終

明治廿五年三月七日印刷
同廿五年三月九日發行
同廿八年十一月廿七日再版印刷
同廿八年同月廿九日再版發行

（天神記）（定價金七錢）

發行者　早矢仕民治　神田區宮本町五番地
印刷者　松本秋齋　本郷區湯島壹丁目拾三番地
發兌元　丸善書店　日本橋區通三丁目
　　武藏屋叢書閣　神田區宮本町五番地
　　中西屋書店　神田區表神保町二番地

版權所有

（賣捌書肆）

神田南神保町　松江堂
神田裏神保町　黑雲堂
神田淡路集館內　上田屋支店
京橋彌左衛門町　巖々堂
京橋尾張町　東海堂
芝南佐久間町　栗ばら
神田區表神保町　中西屋
日本橋通二丁目　本郷區元富士町　盛春堂
横濱　大坂北久寶寺町　文壽堂
京橋　神田一ッ橋通町　武藏屋
日本橋　神田錦町一丁目　有斐閣
丸善書店　丸屋書店
京都　横濱吉田町　便利堂
京都　大坂　京都　有隣堂
京都　大坂　文林堂
京都　吉岡書店
大黑屋　久榮堂

弊店出版の戲曲小說類に付御注告或は御尋問等被成下候諸君にして往々匿名の御狀有之候て御答申上候事も難出來誠に不本意の至りに存候間何卒御本名住所等御認有之度候

口上

○故近松巢林子作淨瑠璃本既刊目錄

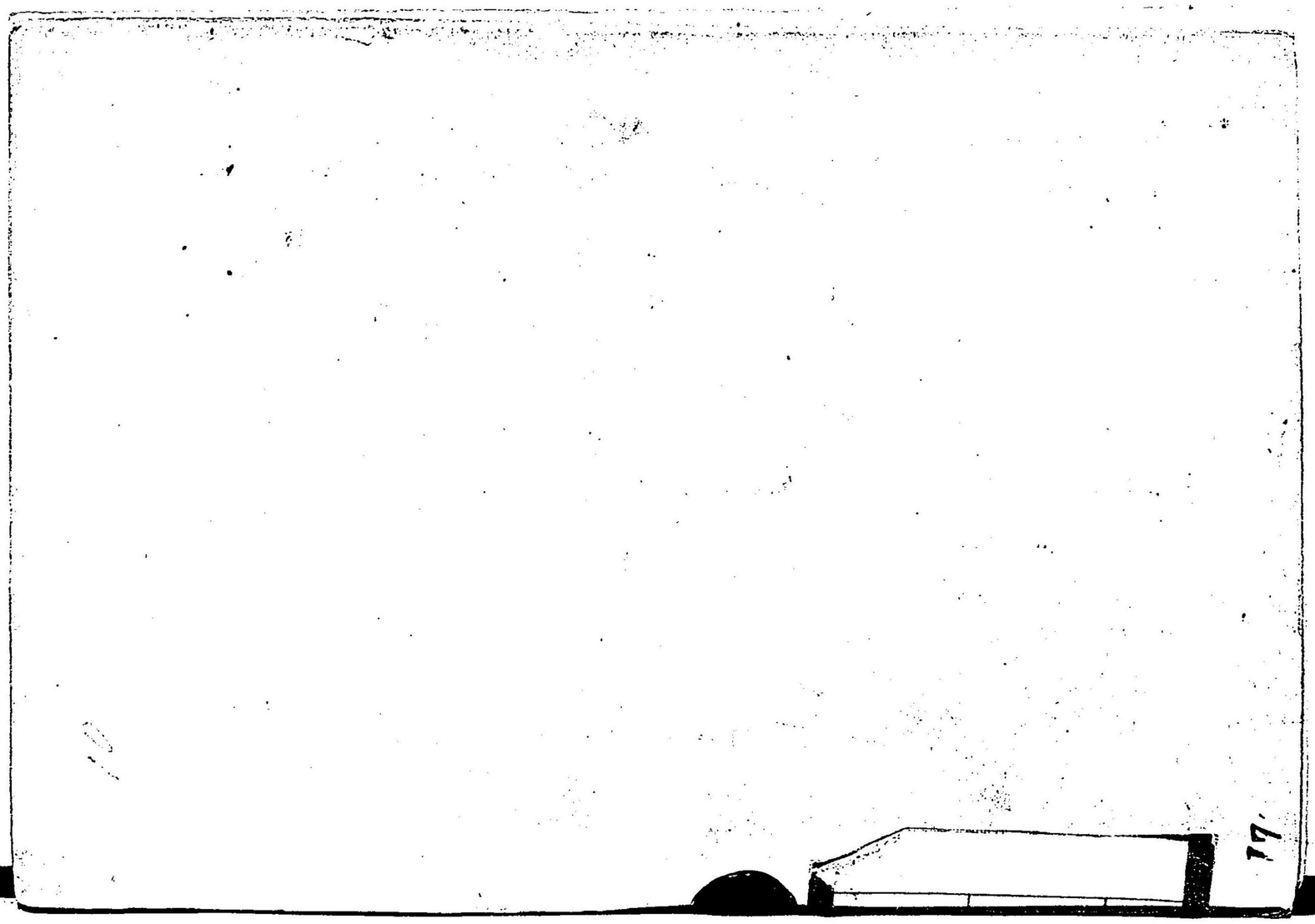
（毎冊定價七錢郵税二錢）

一傾城反魂香
一曾我會稽山
一雪女五枚羽子板
一世繼曾我
一天智天皇
一十二一段
一日本振袖始
一百日曾我
一戀八卦柱暦
一出世景清
一關八州繋馬
一本朝三國志
一吉野都女楠
一嫗山姥
一今宮心中卯月の潤色（合卷）

一蟬丸源氏烏帽子折（合卷）
一最明寺殿百人上郎
一遊君三世相碁盤太平記（合卷）
一國性爺合戰
一國性爺後日合戰
一双子隅田川
一善光寺御堂供養
一一心五戒魂
一傾城酒呑童子
一天神記
一信州川中島合戰
一津國女夫池

一心中重井筒伊達染手綱（合卷）
一心中宵庚申心中天の網島（合卷）
一曾根崎心中心中二枚繪草紙（合卷）
博多小女郎浪枕
一百合若大臣野守鏡
一鎗權三重帷子山崎與次衛門松（合卷）
一卯月の紅葉薩摩歌（合卷）
一唐船噺今國性爺右大將錄倉實記（合卷）

一堀川波の鼓心中萬年草（合卷）
一冥途の飛脚夕霧阿波鳴渡（合卷）
一心中刄は氷の朔日五十年忌歌念佛（合卷）
一長町女腹切淀鯉出世瀧德（合卷）
一生玉心中女殺油地獄（合卷）

○名家傑作

一大塔宮曦鎧
一三世二河白道八百屋お七（合卷）
一末廣十二段心中二腹帶（合卷）
一井筒屋源六總寒晒男色加茂侍（合卷）